日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No.14, 135-145 (2013)

# 原采蘋著「東遊日記」を巡って
## ― 中国地方の文人たちとの交流（１）―

小谷　喜久江
日本大学大学院総合社会情報研究科

# Hara Saihin's *Tōyū Nikki*:
## Fellowship among Poets in the Chūgoku Region (1)

KOTANI Kikue
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Hara Saihin's *Tōyū Nikki* is a diary of her travel through the Chūgoku region on her way to Edo. She left her birthplace in Northern Kyushu in 1828 at age 30 after the death of her father, Hara Kosho, a well-known, yet unpublished, *kanshi* poet and Confucian scholar. Kosho left Saihin a poem, saying, "Do not return home without fame," which drove her to seek literary success and to preserve her father's poetic legacy.

*Tōyū Nikki* reveals Saihin's network of Chūgoku region *kanshi* poets, introduced to her by her father. Meeting Rai Kyōhei, Kan Chazan, Hirose Kyokusō, and others made the long trip to Edo worthwhile. Saihin spent one and a half years traveling while writing the some one hundred *kanshi* poems which comprise *Tōyū Nikki*. The diary includes an anthology of her love poetry, a genre that may appear out of character given that Saihin never married and frequently dressed as a man. Though Saihin chose to remain single, she did fall in love at least twice, judging from her poems. Those at the end of *Tōyū Nikki* were inspired by her first affair of the heart, in Hiroshima.

In this paper I will examine Saihin's poems in order to understand the psychological and social pressures that shaped her life, while considering how her interaction with the Chūgoku region literati affected her career as a *kanshi* poet.

## 1.はじめに

江戸後期の漢詩人原采蘋（1798-1859）は当時の女性では珍しく、遊歴の漢詩人として各地を旅行し、漢詩で綴った旅日記を残した。本稿で取り上げる「東遊日記」は采蘋三十歳の時、父古処の死後の文政十年（1828）六月三日、二度目の江戸を目指して故郷秋月を出郷してから、父の友人である山陽地方の文人を尋ね、詩酒を交わし、旧交を温めながらの道中を漢詩を交えつつ記録したものである。この日記は残念ながら江戸までは続かず、途中、翌年の四月十四日の兵庫県明石までで終わっている。日記の後編には「□思唱和集」と題された漢詩集が付記されており、道中唱和した百二十九首の詩が収められている。またこの日記の外に、文政十一年正月、岡山県宮内を出発する時から記録した人名録「金蘭簿」が自筆本で残っている。「金蘭簿」には日記が途絶えた後に交遊した人物が記録されており、また江戸に着いてから交遊した人物も記録されている。日記が途絶えた後の詳しい道程を辿ることは出来ないが、交遊した人物については知ることが出来る。

しかし、現在目に出来る「東遊日記」は写本のみである。大阪大学「小天地閣叢書」所収の写本と、秋月郷土館所蔵の写本一冊、山田新一郎氏によるペン字書きの写本二種類の四冊である。いずれも誤字、脱字、訂正箇所が多く、それぞれに異同が多く見られる。特に詩の場合は原本ではどうなっていたのか

が分からない今、意味を理解するのに苦慮する場合が多い。

なお、「小天地閣叢書」所収の写本には初めの頁に「旭」と名乗る人物が采蘋に宛てた手紙が付され、また梁川星巌と頼杏坪が采蘋の旅の道中の便宜を図って書き与えた紹介文も付されているが、秋月郷土館所蔵の写本にはこれらは省略されている。

采蘋研究の拠り所である『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』[1]の著者春山育次郎氏も「東遊日記」の道程をその著書の中で紹介しているが、その中に採録されている詩は「小天地閣叢書」所収の写本とも一致しない。春山氏が何を参考にして書かれたものかも不明である[2]。

本稿では、采蘋が父の死後、遺言[3]を胸に江戸での成功を誓って単身秋月を出発してから、その後二十年間を過ごすこととなる江戸までの遊歴詩人としての舟出の旅を考察し、その中で山陽地方の一流文人との交流を通して見えてくる采蘋の決意、或は心情、采蘋の漢詩人としての評価、女性詩人に対する男性詩人の見解などを明らかにしていきたい。また、三十代の采蘋が六十二年の生涯で、おそらく最初の本格的な恋愛を経験したと思われる内容の詩がこの日記と唱和集に見られることから、采蘋の女性としての心情に光を当てて考察を進めることとする。

## 2. 東遊の決意

采蘋がはじめに東遊を決心し、出郷を果たしたのは文政八年（1826）正月二十二日のことである。それまでの原家は、父古処の時に八代藩主黒田長舒の推挙で、藩の重職である御納戸頭と藩校の祭酒を兼任する地位に上り詰め、儒者としての地位を極めた。しかし采蘋十六歳の時に父の古処の突然の退役と、采蘋の縁談が不成立に終わったことなどが重なり、原家にとっての家運の衰退が始まった。この原因は秋月藩のクーデターによって儒者としての地位を維持できなくなったことに加え、再起の望みを託すべき長男が病弱であったことが原家にとって致命的な打撃であった。古処は一漢詩人として家族を連れて遊歴の旅に出かけるうちに、娘の采蘋に後継者としての夢を託すようになる。しかし妙齢の娘を生涯嫁がせないと決心する父[4]には相当の理由があったはずである。この理由に関しては、詳しく語られることもなく、地元秋月では、むしろ秘事として封印されてきた感がある。

かつて亀井昭陽は、東遊に際し別れを告げに来た采蘋を見て、「士崩（古処）の女年将に三十ならんとし、唯読書作詩を以て事と為し、其の云為磊々落々として而も人口紛縛たり、僕の議論此に到りて士崩と合わず」[5]と古処の考え方を非難し、采蘋の東遊に対しても厳しく非難している[6]。これまで両者は共通して、娘の教育は漢学に基づいた「詩書画」の教養を厳しく教え込んだが、その後の娘の将来に関する考え方は異なっていった。この原因は、采蘋の縁談の不成立とも関係していると思われるが、それとは別に文化七年から九年にかけて江戸に滞在した古処は、江戸の文化の爛熟期を身をもって経験している。そこで目にしたのが、奥女中の才能の豊かさであった。才能さえあれば女子にも出世の道があることを古処は実感したのではないだろうか。その証拠にたびたび采蘋に手紙を書き、書を練習するよう教誨している[7]。つまり江戸での経験によって古処の女性観

---

[1] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年。

[2]最近の調査で秋月郷土館の原家資料の中に、当時の宮内省からの送付目録があり、その中に「采蘋自筆、東遊日記（山陽）、漫遊日歴（肥薩）原氏蔵、箱入一巻」とあることを発見したが、その所在は不明である。

[3]「不許無名入故城」

[4] 近藤思川『郷土詩話』思川詩史叢書、1965 年、111 頁。

[5] 国立国会図書館編『稀本あれこれ』1994 年 5 月、93 頁。

[6] 昭陽の告別の辞に「…女子有閨範、閨範無遠離、乃翁視蘋子、礌落若男児、胸中豪気天来大、…古来賢哲詩文集、無送室女遠遊辞、自我始古人将笑、…」とある。

[7]「書抔ハ今少し御上達ハ可有之存候。江戸の女に御国の様なる悪筆愚筆無筆の者ハ身受不申候。いわし売抔の女房ハ格別、御奉公等いたし候者ハおすゑ抔迄も相応ニ達者ニ認申候。何卒御出精可有之候。」宮崎修太「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」（『江戸時代文學誌

は昭陽のそれとは大きく隔たったものになったのではなかろうか。采蘋の尋常ではない才能を認めていた古処にとって、江戸こそがその才能を発揮する場所であると確信していったのである。この確信は原家に降りかかった数々の不幸の度に、古処にとっては益々強固なものとなったと思われる。

こうして原家の家名再興という大義名分を背負って、江戸での成功を目指して二十八歳の時に始めて故郷を出発したが、この時の旅は父の病気のため途中の京都でやむなく帰郷している。その後父は亡くなり、父の願望であった「不許無名入故城」は遺命となって、文政十年（1828）六月三日、再び東遊の途に上る。

## 3.「東遊日記」に見る文人たちとの交流

### 3.1　兄弟に別れを告げる

旅のはじめにまず采蘋が立ち寄ったのは豊前（大分県）に病気療養中であった兄の白圭が住む岩熊村と弟の公瑜（瑾次郎）が住む香春であった。病弱であった兄弟は名医が住んだといわれるこの地方で病気療養の傍ら豊前の子弟を教授していた。岩熊の藤本平山は亀井塾で学んだ人で、白圭を住まわせその塾巌邑堂で子弟の教授に当たらせた。その他にも弓師の医師島野玄珉宅は環翠池亭と称し、ここでも病気の療養にあたった。白圭はこの両者の家を往来して療養と教授に励んでいた。采蘋も幾度かここを訪問し、兄の教授を助けたという。

稗田村にはかつての古処の弟子である村上彦助とその弟健平（後の佛山）が住んでおり、彼等にとっても白圭は尊敬する先生であり、近隣の子弟に学問を教えてくれるまたとない先生であった。采蘋は旅の途中に別れを告げる目的で立ち寄ったはずであったが、結局四十日余りの滞在となり、閏六月十八日にようやく岩熊を出発した。兄の病状は回復の見込みのないものであり、これが最後と覚悟の別れであった。この時、白圭に与えた留別の詩に云う。

| | |
|---|---|
| 秋風吹一葉 | 秋風一葉を吹く |
| 無見不悲哉 | 見るもの悲しまざるは無きかな |
| 同根客異郷 | 同根異郷に客たり |
| 客中又分離 | 客中又分離す |
| 吾曹所情鍾 | 吾が曹情の鍾まる所 |
| 何能得不悲 | 何ぞ能く悲しまざるを得ん |
| 此行聊尓耳 | 此の行聊爾なるのみ |
| 得失唯自知 | 得失唯だ自ら知る |
| 達人在略情 | 達人は情を略するに在り |
| 相會非無期 | 相會期無きにあらず |
| 千金且自重 | 千金且つ自ら重んぜん |
| 各是先人遺 | 各おの是れ先人の遺なり |

兄の白圭とはこの時の別れが最後となった。「此の行聊爾なるのみ、得失唯だ自ら知る」と、この行にいささかの不安を見せるが、「各おの是れ先人の遺なり」と、父の遺命であることを自分に言い聞かせ納得しようとしている。岩熊で兄に別れた後、

> 弟公瑜（瑾次郎）并びに竹田玄中、藤本寛蔵、村上健平、吉田顴吉　吉武玖次郎、弥山の庵に送り到りて飲む。寛蔵は弥山より帰る。餘皆送りて稗田村の彦甫宅に到る。時に明月中天にあり。彦甫胡牀を稗水の中央に移し、別筵を開き飲む。其上既に酔ふ。弟瑾及び玄中巌邑に帰る。予亦た就寝、鶏鳴きて東方微白なり。覺むる時日出づること三竿、宿醒猶ほ未だ解さず、此日亦た留る。

と日記にあるように弟たちが巌邑に帰った後も稗田村の彦甫の所に留まった。翌十九日いよいよ出発。彦甫の送行の詩に次韻して云う。

| | |
|---|---|
| 三千屈指豫期程 | 三千の屈指　豫程を期す |
| 幾歳琴書尋舊盟 | 幾つの歳か琴書をもて舊盟を尋ねん |
| 数脚胡牀移水面 | 数脚の胡牀　水面に移す |
| 一樽村酒有風情 | 一樽の村酒　風情有り |
| 絳河星少懸明月 | 絳河星少　明月に懸く |
| 傑嶂秋高佳夕晴 | 傑嶂秋高　夕晴佳なり |
| 看取此行吾有誓 | 看取せよ此の行　吾に誓有り |
| 無名豈敢入山城 | 名無くして豈に敢へて山城 |

第五号』）柳門舎、1987 年、18 頁。

に入らんや

結句に父の遺言を入れることで、家族や友人との楽しい時間にも区切りをつけなければならないと自らを戒めている詩である。

二十日　晴れ　七ッ半稗江村を発す。大有（健平）並びに猛（健平の弟）、観（観吾）玖（玖次郎）送り來って、門司の旅館に宿る。

二十一日　陰　早朝門司を發す。雀水橋邊にて村大有兄弟に別す。大有（健平）の詩あり、次韻して云ふ。（次村大有送別之詩）

| | |
|---|---|
| 一従萍跡出郷山 | 一たび萍跡に従せて郷山を出づ |
| 離恨綿々如循環 | 離恨綿々として循環するが如し |
| 月桂秋高香馥郁 | 月桂秋高く馥郁として香る |
| 看吾更折一枝還 | 吾を看て更に一枝を折りて還る |

二十二日　陰　早天神田を發す。九ッ比小倉に到る。舟を買ひ、七ッ過馬関に達す。西細江の江大聲（広江大聲）に投ず。

二十四日　晴れ　晝飯後、吉田吉武二生を送行す。阿弥陀寺に到り、別詩に云ふ。

（その内の一首）

| | |
|---|---|
| 二子乗舟帰故城 | 二子舟に乗り　故城に帰る |
| 帳然西望夕陽傾 | 帳然として西のかた望めば夕陽傾く |
| 長風不管離情切 | 長風管らず離情の切なるを |
| 帆影如飛破浪行 | 帆影飛ぶが如く　浪を破って行く |

健平、観吾、玖次郎は第一回目の東遊の時も下関あるいはさらに遠くまで同行した子弟であり、今回も下関まで同行している。ついに二十四日、二生とも別れを告げ、ここからはまさに千里獨行の旅が始まるのである。二十四日の詩には、故郷の子弟との別れの切なさが詠まれている。

### 3.2　琴を学ぶ

ようやく弟子たちとも別れ、一人になって、かねてからの念願であったと思われる琴を習い始めた。琴については采蘋の詩中でも珍しい記述であり、どのような種類の琴であったのかは定かではないが、文政八年に福岡の亀井家を訪問した采蘋に託して、亀井昭陽が古処に与えた手紙に「日夜月琴賑々敷事に而皆相楽申候」[8]と見え、采蘋もおそらくこの時に月琴の調べを耳にしていたと思われる。月琴は中国から長崎にもたらされ、その後日本国内で流行したようである[9]。みだらな音楽と揶揄されることもあったが、亀井家は一家を揚げてこれを習い、楽しんでいた様子が昭陽の手紙から分かる。采蘋の習った琴はこれと同じ琴であったのか、あるいは七弦琴であったのか今は知るすべがない。七弦琴は梁川紅蘭や江馬細香も弾じていたことが詩に見えている。

友人阿策とはどこで知り合ったのか、あるいは父に同行した前回の旅で知り合っていたのかも知れない。数日間の琴の師匠と楽しい日々を過ごしたことが日記から窺われる。采蘋の人生は後半になるに従い、父の遺言が重くのしかかり、益々男性的な雄壮な詩が見られるが、三十歳の采蘋が女師匠から琴を習うという女性らしい一面をこの日記から垣間見られるのは貴重なことである。

二十六日　晴れ　晝飯後、友人阿策の處にて飲む。夜に入りて帰る。

二十七日　晝前雷雨、阿策を訪ふ。琴を学び、夜に入りて帰る。

二十八日　晴れ　晝後又琴を学ひに往く。夜に至る。

二十九日　晝後琴を学ふ。海鷗吟社に帰り、郷山の白雲裊なるを望む。忽ち憶ふ、昔日厳君に陪して此地に遊び、此亭に寓して、主人と父子

[8]春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、111 頁。

[9] 中尾友香梨『江戸文人と明清楽』汲古書院、2010 年 2 月

と日々閒談を相忘れ、優遊し、詩を吟じ、酒を酌みて、花月の興曽て覇旅の愁無く、宛も郷里に在りて、吟友と周旋するが如し。今日、隻身家を離れて、将に武昌に東遊せんとして復た吟社を過ぎ、主人秋水と談じて舊時に及ぶ。各々風樹之感有り、覚えず泫然として涙下る。趨り帰りて室に入り、悵然として賦して此れを主人に示す。

| | |
|---|---|
| 単身萍泛幾時休 | 単身萍泛幾つの時か休まん |
| 吟社風光感昔遊 | 吟社の風光　昔遊に感ず |
| 賓主当年猶有恨 | 賓主当年猶恨有り |
| 忘機相共狎沙鷗 | 機を忘れ相共に沙鷗に狎る |
| 四方有志莫由還 | 四方に志有るも還る由莫し |
| 日々思家未暫閒 | 日々家を思い　未だ暫くも閒あらず |
| 硯海西南山起處 | 硯海の西南山起る處 |
| 遥天一髪是郷関 | 遥天一髪　是れ郷関 |

〇昔遊；かって訪れたことがあること。〇沙鷗（さおう）；水辺で憩うカモメ。〇郷関（きょうかん）；ふるさと。生まれ故郷。

海鷗吟社の広江大聲は頼山陽の門人であり、かつて山陽が九州遊歴の途次、ここに滞在したところである[10]。また采蘋も十八歳の時、父に同行してしばらく滞在した経験があり、旧知の場所であることからここに十日間滞在している。采蘋はここに滞在しながら阿策の所に通い琴を習ったのである。上記の詩には父を失ってまだ日が浅い采蘋にとって、主人秋水との父の思い出話は涙を誘うものであり、十三年前の幸せな状況とは打って変わった現在の身の上を詩に託して秋水に贈った。

### 3.3　相思の詩

一日　朝飯後寝る。晝飯の後、廣陵の□有るを聞く。直に策の處に到り告別し、帰つて家書及び知友に与ふる書を認めて夜を徹す。

二日　朝友人に詩一首を賦して贈る。

與君離別後無日不相思対鏡慵梳髪弄毫狂写詩
（君と離別の後、相思はざる日無し。鏡に対し梳髪を弄し、毫も詩を狂ひ写すこと慵し）

| | |
|---|---|
| 扁舟従此去 | 扁舟此従り去る |
| 千里向天涯 | 千里天涯に向う |
| 墨和双行涙 | 墨に和す双行の涙 |
| 親緘寄阿誰 | 親しく緘じて阿誰に寄する |

晝後乗船す。八ッ時馬関を発し、夜田浦に泊る。

七月に入って広島に行く舟があるのを聞きつけ、すぐに阿策の所に駆けつけて別れを告げる。その後家族に宛てた手紙や、友人にお礼として贈る書を夜を徹してしたためている。翌日には友人に贈ったとされる詩一首があり、その詩題には、一体下関で何が起きたのかと思わせる内容が書かれており、明らかに恋愛の情が表現されている。詩の転句にも離別の悲しさが詠われている。しかし、この土地でいったい何が起こったのかはこれ以上の記述がないので知るすべがない。

三日　未明　新月を拝す。　田浦を発し、暮に鳥之島に泊る。三日より五日に到る。三日の間姫島を見る。

四日　日向に到り、延岡領八子に泊る。

五日　築城に到る。伊美候（港）に暮に泊る。硫黄山に新月を看る。悵然として感有り。

六日　未明發す。晝の後、大埼瀬戸を遡る。潮汐は盤渦として、風帆疾きこと破浪聲有るが如し。両岸の青山走りて、逃ぐる如し。樹間の蝶聲猶ほ耳に在り。百里一瞬にして忽ち水急にして石出に到る。一帆影處りて風に飽く。舟却退して進む能はず。良久く一前一却一良久くしてまた進む。遂ひに大海に出づ。順風潮に乗り、餔時、坊州岩国穴（阿那）口に達す。

[10]春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、136 頁。「山陽先生遺稿巻五」『詩集日本漢詩　第十巻』には「観歳晝示在塾廣江大聲」と題する詩がある。

〇潮汐（ちょうせき）；うしお。海水の干満。〇盤渦（ばんか）；ぐるぐると渦を巻く。〇餔時（ほじ）；夕方。

七夕　舟は厳島に到る。故人伊藤氏に投ず。此の日朝飯後より―不快且つ船中の疲れ、一時に發りて一晝夜前後覚えず。堅臥して坐す。
八日　病今だ夜まで癒えず。
九日　同前。終日廣陵の蘭陵来りて、ともに飲む。
十日　晝後より病少し癒ゆ。

七月二日、広島行きの舟に乗り、田浦、鳥の島、姫島を回り、日向、延岡領八子、築城を経て、漸く舟は九州を離れ、七日夕方に広島の厳島に到る。ここで伊藤氏に宿る。ここも十三年前、父母に同伴して訪れた場所であり、旧知の伊藤氏のもとで、まず船旅の疲れを癒す。それから「十月十日　廣陵を發し、廣村に到る。」と日記にあるように約三カ月間広島の各地を往復し、依頼に応じて書を認め、旧知の情を温めながら詩酒を交わし、詩嚢を肥やした。十二日には廿日市に到り、櫻井四郎を訪ね、翌日には府中に到り、原田十兵衛のもとでしばらく滞在する。このほかにも広島には父の友人頼杏平や神辺の菅茶山がおり、父亡き後の後見人の役割を果たしている。残念ながら菅茶山は采蘋が広島滞在中に没し、尋ねた時には墓参となった。文政八年の東遊の際に滞在し、詩を交わしていたが、その再会は果たすことが出来なかった。

十一日　全快し、古詩の韻範を讀み、詩一首を賦す
十二日　廿日市に渡る
十三日　昼後櫻井四郎を訪ふ。夜に入りて帰る。
十四日　快晴　早起し、府中に到る。原田十兵衛を訪ふ。偶たま不在、男庸兵衛出迎え、夜に入りて主人帰り、小酌す。
十五日　晝後小酌し、十兵衛を訪う。夜に入りて、嘗牀を外庭に移し、又酌す。少雨遽に到る。初夜、漸く晴れて、月色玲瓏たり。詩一首。

| | |
|---|---|
| 客乗投君如在郷 | 客に乗じて君に投じ　郷に在るが如し |
| 席無賓主座相忘 | 席に賓主無く座相忘る |
| 假山遥控真山媚 | 假山遥かに控える真山の媚 |
| 詩興漸知佳境長 | 詩興漸く知る佳境の長きを |
| 欲納新凉晩呼酒 | 新凉を納んと欲して晩の酒を呼ぶ |
| 還迎明月屡移牀 | 還迎の明月屡し牀を移す |
| 一家敬愛誰能似 | 一家の敬愛　誰か能く似て |
| 我口従来糊四方 | 我口従来　四方に糊す |

〇假山；築山

中元の祝儀に翠挹、柏原山池来る。
十六日　晴　暮前小雨あり。　終日無事、暮前より醉翁と酌。
（七月既望、望瀛亭書感示主人酔翁。余曽従先人来遊。距今十三年、同月日也）

| | |
|---|---|
| 曽遊君記不 | 曽遊の君に記すや不や |
| 来此望瀛州 | 此に来たって瀛州を望む |
| 離別十餘歳 | 離別十餘歳 |
| 光陰一転頭 | 光陰一転頭 |
| 醉翁老益壮 | 醉翁老いて益ます壮なり |
| 気寛□無憂 | 気寛□無憂 |
| 誰識天涯客 | 誰か識る天涯の客 |
| 重斟既望秋 | 重斟既に秋を望む |

文化乙亥（十二年）七月十六日　予　先人に陪して望瀛亭に遊ぶ。主人原田翁は高陽の徒なり。醉翁を自称し、今茲に予将に東遊せんとす。江都にて便りして道ふ、重ねて醉翁を訪ぬ。醉翁年古稀方に過ぐ。一たび鯨飲すること舊に依りたり。余其の矍鑠として衰へざるを喜びて、聊か一篇を賦して以て宥と為し、且く懐舊の情を申るに云う。

十四日、府中に到り、原田十兵衛を訪ねる。この

地の割庄屋で資産家であり、自らを酔翁と称する十兵衛の望瀛亭には采蘋十八歳の時にも父と訪れた場所である。七月十六日は奇しくも十三年前の同じ日であり、その時の事を思い、感慨を詠った詩と文章が上記のものである。

十七日　晴　暮前小雨あり。夜に入り、厳島の詩を敲す。

| | |
|---|---|
| 濛々暮潮涵廟廊 | 濛々たる暮潮　廟廊を涵す |
| 緑烟消盡夜初凉 | 緑烟消し盡きて　夜初めて凉し |
| 人如唇気楼中座 | 人は唇気楼中に座するが如く |
| 月自鼇頭山上揚 | 月は鼇頭山上自り揚る |
| 為客三看満輪影 | 客と為り三たび看る満輪の影 |
| 聞猿寸断九回腸 | 猿を聞きて寸断す九回の腸 |
| 唯恐阿母懐児切 | 唯恐る阿母児を懐ふこと切なるを |
| 一夕秋風鬢作霜 | 一夕の秋風に鬢霜と作らん |

十九日　暈　晴、終日蒸す。また書を認め、且つ詩を賦す。

| | |
|---|---|
| 相逢談往日 | 相逢ひて往日を談ず |
| 感慨一何深 | 感慨一に何んぞ深し |
| 弾鋏秋聲竹 | 鋏を弾く　秋聲の竹 |
| 彎環月下林 | 彎を環る　月下の林 |
| 帰心来此息 | 帰心此に来りて息む |
| 留著對君斟 | 留著し　君に対して斟む |
| 吾豈驚人語 | 吾豈に人語に驚かん |
| 平生酖苦吟 | 平生　苦吟に酖ける |

挹翠楞主人の持する、先人の次韻せる籟先生の什を示さる。吟誦一回、悵然として往日陪遊の時を追思す。悲感兼ね至り、遂に自ら讀貂を量らず、畫きて其の需めに應ず。

○讀貂；拘尾続貂（クビゾクチョウ）＝他人の残した仕事を継ぐことを謙遜して云う言葉。優れたものの後に、粗悪なものが続くこと。

十七日には厳島の詩を賦す。「三たび看る」と詩中にあることから、厳島を訪れたのは三度目であることが分かる。前回は両親とも見たであろう満月を見上げて、故郷で暮らす母に思いを馳せている。酔翁の家では詩を賦したり、求めに応じて書を認めて過ごし、「帰心来此息」とあるようにホームシックもようやくおさまった様子が上記の詩から読み取れる。十九日には原田酔翁の親族である原田挹翠が持っていた父古処の詩に頼山陽が次韻した詩を見せられ、それを吟誦するや、たちまちかつて父に同伴してこの地を訪れた時の事を思い出し、悲感同時に湧きおこり、自らの非力を顧みず、人々の求めに応じて書を認めた。

廿日　昨日予将に廿日市に還らんとす。前夜挹翠主人に招かれ已むを得ず留滞す。朝飯の後書を認む。七ッ比酔翁と酌す。離杯し七ッ半より挹翠楞主人に到るが不在。十兵衛妻及び翠挹妻と飲む。夜に入り主人と其の先生阪井百太郎[11]帰り同飲し、席上坂井に贈す。

| | |
|---|---|
| 偶為折簡客 | 偶たま折ひ簡の客と為り |
| 訪舊楽新知 | 舊を訪い　新知を楽しむ |
| 已列嘉賓席 | 已に嘉賓の席に列す |
| 羞無幼婦辞 | 羞づ　幼婦辞の無きを |
| 旦迎松梢月 | 旦に迎ふ　松梢の月 |
| 同盡手中杯 | 同じく盡す　手中の杯 |
| 心醉吾帰去 | 心醉し　吾れ帰去す |
| 尋盟應有期 | 盟を尋ぬるに應に期有るべし |

○折簡；竹簡や紙などを半分に切って書いた失礼な手紙。

廿一日　暈　晴　甚だ蒸す。日出て府中より歩きて廿日市に還る。原田元唐、森野庄次郎送る。

廿二日　将に宮島に還らんとするに、予に書を

[11] 阪井百太郎は萩藩士土屋蕭海の師でもある。

乞ふ者有り。遂に留まりて書を認む。殆んど七十枚、高木同、堀田梅太郎。

廿三日　二百廿日船発せず滞る。午後高木に到り離杯を酌む。夜に入り妓を聞く。

廿四日　堀田に到る。沙汀を歩みて貝を拾ふ。晝後、福田氏来る。潮を候ち網を下ろす。直ちに鱠を為りて酒を酌む。夜に入り、福井真宰に到りて飲む。此夜夜深に帰る。大風怒濤岸に掀りて終宵夢恬んぜず。

廿五日　風尚息ず。暮景より小酌、夜に到り、某家にて酌す。

廿六日　夜、福田氏と飲む。

廿七日　船に乗り、厳島に帰る。堀田梅(太郎)、福田大蔵を送る。

廿八日　夕に、備前岡山の人守田厚治に會し、ともに小酌す。

廿九日　無事

卅日　同前暮より小酌し、夜に到る。

七月二十日に府中を離れて廿日市に帰ろうとするが、結局挹翠主人に引きとめられ、醉翁や藩儒である阪井百太郎（虎山）らとの酒宴に同席する羽目となる。翌日ようやく原田元唐、森野庄次郎に送られて廿日市に帰り、二十二日には宮島に帰ろうとするが、今度は書を乞う者あり、七十枚を書いたという。そうこうしているうちに風のため舟がなかなか出航しないので、高木、福田大蔵、堀田梅太郎等と交遊して二十七日にようやく厳島に帰る。上記の府中と廿日市での采蘋に対する人々の待遇は、二十八歳の時に采蘋が長崎で経験したことを想起させる。書を求められ、連日酒宴に招待される人気者の漢詩人の姿は、後に遊歴する房総、肥薩の旅でも同様に見られる。この特性は采蘋の生来のものであると考えられる。

### 3.4　広島での二カ月

四日　（座主）を訪ぬ。晝飯後、石州の人と廣陵に渡り、室（屋）に宿る。

五日　早朝細工町に到る。長門屋蘭陵を訪ひ、世話にて天神町香月(香川)氏に旅宿す。夜に入り、藤屋市郎兵衛□□、蘭陵の子研、吉村柳太郎、大塚（昌）伯桂省、波屋（世並屋）八助と水楼にて飲む。

六日　夜、蘭門屋藤屋桂省と飲む。

七日　無事、夜、老妓と飲む。

八日　堀田梅太郎、山田庫介来る。遂に同伴して一丁目山縣屋に到り酌す。

九日　夕、大野屋水亭、内藤屋、長門屋文叢堂（雲）聊太郎、米屋文次郎桂眉と飲む。また船を泛べ酌す。月落ちて帰る。此夜文次郎□到賦詩□

十日　終日寝る。

八月四日、広島市に到り、厳島で知り合った中西蘭陵を訪ね、彼の世話で天神町の外科医香川旦斎に投宿する。中西蘭陵は通称吉左衛門といい、藩の銀札場元役を務めた有力な商人で、俳諧・画を善くする文人であった[12]。広島では中西蘭陵という有力者の人脈と思われる町年寄の波屋（世並屋）八助や米屋文次郎桂眉らとの交流や、老妓との交際の様子は、殆ど長崎での半年間を思わせる。地元有力者による斡旋によって優遇された采蘋の旅先での日常が見て取れる。

### 3.5　広瀬旭荘との再会と頼杏坪との会遇

十一日　暈、晴。廣瀬吉甫（旭荘）、内大介、岸井管吉来訪す。舊を談じ酒を酌み旅宿に帰る。予夜に入り寓居を訪う。

十二日　吉甫廣秀才に贈る。

| | |
|---|---|
| 身跡悠々雨断篷 | 身の跡悠々として雨篷を断つ |
| 飄然相遇是何風 | 飄然として相遇ふは是れ何の風ぞ |
| 明朝吹到分襟處 | 明朝吹き到れば襟を分かつ處 |
| 還送弧帆盡碧空 | 送り還る　弧帆盡く碧空 |

○断篷（だんほう）；拠り所のないさま。ゆくえ

[12]春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、139 頁。

を定めぬ旅人のたとえ。

午時三人、酌酒に到り、談話し夜に入り帰る。

十三日　大塚昌伯和韻し、予に詩を寄せ示す。
予即席に疊韻し和答す二首。
また次韻して贈らる。

得失寧関粧不粧　得失寧んぞ関はらん粧と不粧と
鏡奩何必□□□　鏡奩（れん）何んぞ必ずしも□□□
風流到處通家足　風流到る處　通家に足る
未向文場用剣芒　未だ文場に向ひて剣芒を用ひず

○文場；文学者の社会。文学界。

其二、
丈夫應有丈夫儀　丈夫應に丈夫の儀有るべし
児女寧無児女姿　児女寧ち児女の姿無らんや
若使臭聲在淫具　若し臭聲をして淫に在りて具はしむれば
人間何地避嫌疑　人間何れの地にか嫌疑を避けん

此夜、春曦楼の賞月にて杏坪先生に謁す。廣吉甫に別る。
また主人に贈る。(十三夜従杏坪先生賞月於春曦楼)

蒼范烟霧望難分　蒼范烟霧望めども分け難し
月下関山笛裏聞　月下の関山　笛裏に聞く
吾有剪刀磨未試　吾に剪刀有り　磨けども未だ試さず
為君一割雨餘雲　君が為に一割せん　雨餘の雲

・剪刀；はさみ

十一日には、東遊の後帰郷する途次の廣瀬旭荘（1807 -1863）と偶然出会うこととなる。文政八年、采蘋の東遊の前に、亀井家の草江亭で別れて以来の再会であった。内（田）大介、岸井管吉とともに寸時を惜しんで語り合った様子が日記から読み取れる。十三日の夜には、たまたま帰省していた広島藩儒頼杏坪（1756～1834）の春曦楼の賞月に旭荘とともに招かれ[13]、二人は初めて杏坪に面会する機会を得た。旭荘は采蘋とともに韻を分かって詩を賦したことが『梅墩詩集』に見える。この日旭荘は舟で広島を離れ帰郷の途に就いた。

十三日の昼には大塚昌伯の和韻に対し畳韻した二首がある。大塚昌伯の詩の内容が分からないのは残念であるが、采蘋のジェンダーに関する見解が読み取れる貴重な詩である。

十五日には藤屋市郎兵衛の臨瀦楼に杏坪その他諸人が招かれ采蘋も同席して、詩の応酬あり。十六日には茶人の淡堂という人の賞月の会に杏坪とともに招かれ、次の詩を賦す[14]。

十六夜　快晴。　杏坪先生と月を賞し、談ず。
（淡堂同杏坪先生賞月）

笑看窓紙明　笑ひて看る　窓紙の明らむを
啞々宿鴉驚　啞々として　宿鴉驚く
風未雲無跡　風未　雲は跡無く
松間月有聲　松間　月に聲有り
茶従陸翁品　茶は陸翁の品するに従ひ
詩重謝公清　詩は謝公の清きを重んず
酒渇寒泉影　酒渇きて　寒泉の影あり
煎来欲解酲　煎来りて　酲を解かんと欲す

この後、十月十日広島を離れるまで、蘭陵ほか広島の名氏らと交遊し、また杏坪先生を訪い、その息子采真ともたびたび交遊している。采蘋は頼山陽の

[13]『梅墩詩集』巻一（富士川英郎解題『詩集日本漢詩第十一巻』汲古書院、394 頁）に「春曦楼席上同頼杏坪先生原女史賦、得韻虞、時余将發船。」と題する詩がある。

[14] 春山氏によれば、この詩は兄の白圭に手紙で知らせその中で「此夜五律二首を作り申候。杏坪翁大に驚かれ申候」と報告しているという。

実家を何度か訪れたことが、山陽の母梅颸(1760-1844)が采蘋に宛てた十月九日付けの手紙によって知ることが出来る[15]。広島を離れるに当たり、頼杏平もまた十月九日付で旅先の紹介状を采蘋に書き与えている。この原本は秋月郷土館に保管されているが、小天地閣叢書所収の「東遊日記」の最初にはこの紹介状の写しがある。以下にその全文を揚げることとする。

> 此采蘋女史者故之原震平古處山人之息女にて才学一時之閨秀と見候。遺孤可憐候。其御地被参候ハヽ御垂青所希ニ御座候。
>
> 丁亥十月九日
>
> 杏坪老人

| | |
|---|---|
| 尾道 | 元吉 |
| | 把翠園 |
| 今津 | 牡丹園 |
| 神辺 | 黄葉夕陽邨舎 |
| 備中笠岡 | 小寺君 |
| 鴨方 | 西山君 |
| 長尾 | 小野泉蔵君 |
| 倉敷 | 観龍寺上人 |
| 同 | 岡迂庵主人 |
| 岡山 | 萬波君 |
| 加古川 | 中谷諸子 |

以路次為次第

十月十日以降の道程はほぼこの紹介状の人物を辿ったことが日記から読み取れる。

### 3.6 「東遊日記」の道程

「東遊日記」の道程を地図上に示すと以下のようになる。番号で表示した滞在地・訪ねた人・滞在期間は下記の表で示した。

図：筆者作成

(1)秋月　文政 10／6／3 出発
(2)猪騰　6／3
(3)香春（平森宅）　6／4
(4)稗田（村上彦甫宅）　6／5・6／19
(5)弓師（医師鳥野玄珉）　6／6
(6)築城　6／7
(7)岩熊（藤本寛蔵）　6／8～閏 6／18
(8)稗田（村上彦甫宅）　6／19
(9)門司（旅館）　6／20
(10)小倉　6／22
(11)下関（西細江の廣江大聲）　6／22～7／2
(12)田の浦　7／2
(13)姫島　7／3 に見る
(14)宇島　7／4
(15)伊美　7／5
(16)玖波港　7／6
(17)宮島（故人伊藤氏）　7／7・7／27
(18)廿日市（櫻井四郎）　7／12・7／21
(19)府中（原田十兵衛）　7／14・7／21
(20)広島（中西蘭陵・堀田梅太郎・山田庫介・広瀬旭荘・頼杏坪・頼采眞・大塚昌伯）　8／4～10／10
(21)尾道　10／19
(22)神辺　12／3～12／7
(23)笠岡（小野李山）　12／8

[15]春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、143 頁

(24)鴨方（西山復軒）　12／11～12／17
(25)長尾　（小野泉蔵・松下清斎・丸河松陰　12／17～12／19
(26)備中宮内（真野竹堂）　文政 11／12／20～1／16
(27)岡山　1／16
(28)和気（赤石希範・長谷川文右衛門・北方宅・赤石退蔵宅）　1／20～1／24
(29)赤穂（小田謙蔵）　1／25～3／25
(30)姫路（深沢主人）　3／末～4／1
(31)飾磨（内山整莽）　4／2～5
(32)加古川（高橋氏・中谷真作・中谷三助宅）　4／6～7・4／10
(33)尾上　4／8
(34)明石（前田氏）　4／13
(35)兵庫（小田伊織・藤田萬年）　4／14

## 4.おわりに

「東遊日記」は、采蘋の遊歴の記録としては最初に書かれたものである。父の死後、独立生計を余儀なくされた三十歳の女性の、不安と意気込みの入り混じった道中記である。采蘋は詩才に恵まれた女性というだけでなく、詩人として各地に名の知れた原古処の娘という父の名声に助けられ、頼杏坪・菅茶山・頼山陽・梁川星巌等の著名な漢詩人との交流を続けながら一年半をかけて江戸に辿りついた。

まさに「舊を訪い　新知を楽しむ」旅であったことは日記に書かれている通りであり、行く先々で人に招かれ、書を乞われ、詩の贈答があった。「女史多口」[16]と戸原卯橘の日記に見えるように、おそらく酒席での采蘋は話し上手で楽しい女性であったのではないかと想像する。また采蘋は長崎では丸山の妓女達に慕われており、この旅でも「夜に入り妓を聞く」とか「夜、老妓と飲む」などの記述が見えることから采蘋の嗜好が知られる。

この日記に見られるもう一つの特徴は、采蘋の女性としての特性をこの旅では解放して、むしろ楽しんでいる様子が垣間見られることである。たとえば琴を習ったり、旅先でのアヴァンチュールを経験したりと、おそらく父が生きていた時には出来なかった事をこの旅で経験したものと思われる。旅の解放感と三十歳という年齢のなせる出来事として当然と思える出来事である。

「東遊日記」は翌年の四月十四日の兵庫県明石まで続くが、紙面の関係上本稿は十月十日、広島を離れる時までで終わりとし、次回の紀要に続編を載せたいと考えている。日記の後編にある「□思唱和集」中の無名氏と応酬した詩は、先行研究や山田新一郎氏の編集した「采蘋詩集」等には採録されていない。采蘋の女性としての素直な心情を明らかにする絶好の資料であるため、続編ではこの詩集について詳しく述べることとする。

(Received:September 30,2013)
(Issued in internet Edition:November 1,2013)

[16] 「戸原卯橘日記」（「第五章　教育と文化」『筑紫野市史　下巻　近世・近現代』筑紫野市、1999 年 3 月）